

もしかしたら静雄は帝人が恋人ごっこではなく、臨也に本気で恋したことに気づいていて、だから失恋したならばやけ食いが定番だ、などと思ったのかもしれない。そんなことに気がついたのは、静雄に礼を言って別れ、帰路につき途中だった。

違うかもしれないし、そうかもしれない。ともかく、静雄にせわしなくケーキを勧められている間は束の間、臨也のことを考えるだけの余裕はなかった。そう言う時間が少しづつ延びていつて、そうして思い出になるのだろう。

(それにしても静雄さんとケーキバイキングなんて、すごい非日常だったな)

そもそも帝人はケーキバイキング自体初体験だ。しかも静雄の奢り。貴重な体験ではあった。

そんなことを考えているうちに、すっかりスーパーに行くことは忘れてしまっていた。まあいいか、と思いながらアパートの階段を上る。古いアパートの階段は、そつと歩いてもと大きな足音を響かせた。そうして、玄関に寄りかかるようにして立っている人物に気づく。

「やあ」

「臨也、さん」

見慣れた柔和な笑顔。最初に浮かんだのはどうして、という疑問だった。何か用があるにしろ、メールで十分だろうに、なぜわざわざ帝人のアパートまで逢いに来るのか。

「中に入れてくれる？」

「……どうぞ」

なにを考えているのかわからないが、それが臨也らしい。帝人と違って臨也は失恋したわけでもないし、なにもかもが一ヶ月前に戻っただけにすぎないのかもしれない。そう思えば、突然やってくるのも不可思議ではなかった。

狭い自室へと招き入れ、そういえば、と思い出す。

「あの、これ今日もって帰りますか？」

言って、台所の収納部分に置いていたコーヒーマーカーに鍋、カセットコンロを彼に見せた。買ったときの紙袋もとつてある。

「あれ。使ってなかったんだ。帝人君、コーヒーマー好きだよね？」

「だってこれは僕のじゃないですから」

臨也が買ったもので、自分は置き場所を提供していたにすぎない。恋人ごっこが終わったから、と捨てるのも悪い。何しろまだ新しく、十二分に使える。そのうち返そう、と思っていたから、ちようど良かったと言えた。

「いらない。帝人君が使いなよ」

素っ気ない口調で臨也は言う。その様子に、あれ、と思った。

(なんか、機嫌悪い、よね?)

「そういうわけにはいかないです」

「ふうん。俺の持ち物を使ったら、シズちゃんに嫌われるから困るとか？」

なぜ、そこで静雄の名前が出てくるのだろう。静雄をこの部屋に招いたことなどないというのに。